

柔道

VOL.80 NO.3

五月号
MAY 2009
JUDO



柔道院

柔道院発行 定価 500円(税別) 送料別

ピックで柔道は正式種目として採用されていることは素晴らしいことだと思います。しかし、その反面、精神面が少し足りないのではないかと、いうことを私は感じております。確かに競技面だけは、他の競技と同じように世界的なものとなっておりますけれども、柔道の修行によって「人間を形成する」、「精神を修養する」という面がまだちょっと足りないような感じもします。というのは、私は、かつて昭和26年から約20年近くヨーロッパで柔道指導をしていたことがあります。その当時、まだ柔道はオリンピック種目にも入っていないこともあり、柔道は珍しく、小さい者が大きい者を投げる、小さい者が大きい者を制する技術も例もない外国人はそういうことにあるが、柔よく剛を制する、いわゆる「精力善用」これに外国人は非常に興味を持っていたのです。柔道というものは小

さい者が大きい者を制することができ、それは本当かと。そういう状況下で柔道の技術について彼らは非常に興味もあつたわけですね。レスリング、サンボ等とは別に柔道は体重を考えない、小にして大を制する技術として広まったわけですね。そして私がヨーロッパの人々に対して「体重別の試合などは本来の柔道ではない」ということを言っていて、彼らもそれに納得していたわけですね。柔道は小にして大を制する。技術によって、技によって相手を制するのだとヨーロッパ選手権は無差別でやっておりました。私はそれが柔道の本来の姿だといってやっておつたところ1964年、東京オリンピックで日本が率先して体重別を始めたわけですね。非常に私は残念に思いました。今は体重別があたりまえ。本来は柔道は無差別。無差別でいわゆる技術で相手を制する。それが本来の姿であり

ましよう。柔道がレスリングと同じように階級を増したら何のための柔道だということになります。これ以上増やしたらいけないということで、いろいろの経験などを踏えてお話を申し上げます。以上で終りたいと思います。

(2) 講話「世界の国々は日本の柔道をどのように見ているか」

講道館 国際部課長代理

五段 大辻広文 先生

2009グランドスラム・パリ国際柔道大会から昨日の夜、帰ってきました。まずは柔道ではなく、世界の人達は日本人をどのように見ているかということを私なりに考えてみました。こういう話があります。ある豪華客船が航海中に沈み出しました。さあ大変という事で、船長が乗客を何人か船から飛び降ろさせなくてはならない時、一計を案じ、アメ

リカ人には、「あなたが船から海に飛び込んだら英雄になりますよ」と言う。アメリカというところはヒーローの国なので、アメリカ人は飛び込んでいく。イギリス人には、「飛び込んだら、あなたは紳士ですよ。ジェントルマンになります。だから飛び込んで下さい」、ドイツ人に聞かしては、「飛び込むのがこの船の規則です。ルールですから飛んで下さい」、イタリア人には「飛び込むと女性にもてますよ」、フランス人には「飛び込まないでください」と言う。飛ぶのだそうです。最後の日本人には「もう皆、飛び込んでいますよ。あなた一人だけです」と言われる。日本人は飛び込むというのが国際的なジョークになっています。つまり、日本人は何でも自分から率先してはやらない。周りの雰囲気を感じながらやるというふうな感じに世界で映っているように

す。日本は昔から農耕民族の為、みんなで協力しながら生きていく必要があり。狩猟民族とは違った行動をするというのもうなずけると思っています。

世界の国々の柔道関係者が日本の柔道をどのように見ているかを考えてみます。世界が見た柔道と日本が見た柔道の視点の違いについて考えてみます。ここにフランスとスイスで出されている柔道の雑誌があり、フランス語で書かれた論文です。が、イビス・カデットという方が嘉納治五郎師範はオリンピック種目に柔道を入れたくはなかった、という論文を書いておられます。私もそれをある方に日本語に訳していただいて読んでごくびっくりしました。ゆっくり読んでみます。『嘉納治五郎先生はオリンピックの理念を擁護し東京への誘致に大いに尽力した。しかし自身の専門である柔道がオリ

ンピックのスポーツ種目になるための活動を一度もしたことはなかった。彼はそこに大きな危険性を認識していた』、このようにこのフランスの方は論文で書いておられます。もう少し詳しくいいますと当時、日本の軍事的状況下にもかかわらず、オリンピック委員会から1940年の東京オリンピック開催をとりつける使命を果し師範は帰国の途につかれた。そしてその船内で死去された。その東京が開催旗の返上でオリンピックは中止となった。そして1964年の東京オリンピックは最も重要なものであった。世界各国のIOCメンバーの多くは嘉納を知っていた。故人を記念して柔道をオリンピック種目にするという日本側の提案を受け入れた。こうして柔道が東京オリンピックで初めて登場したのです。師範の意志の現れとしてではなく、本人は種目になることについては一度も言

及しないのでありました。彼自身柔術を習おうと先生を探していたころ、柔術家達が行っていた嘆かわしい光景が記憶に残っており、大衆の目には蛮行と下品さの同義語となった柔術を、人前に見せられるものではないか、とフランスの方は書かれています。師範は柔術を柔道と名称を変え1930年代初めまで柔道の試合に観客の存在をずっと拒み続けた理由でもあります。柔道の試合は非公開で行われ、師範は試合に勝ち負けがある以上勝敗そのものに重点が置かれる状況を見て、試合の真の目的について多くの執筆を行い、審判規定の修正にも取り組みました。真の柔道の目的が崩れ始めていると気づいた師範は、柔道は多様で奥深いものであり、試合は柔道の一側面にすぎず、試合に勝つことが柔道の最大の目的ではない、柔道でお金を稼ぐことは

できず、競技者はすべてアマチュアであること、これらが重要であると記しています。柔道とは普遍的な道であり、それを応用するところによって幾つかのカテゴリに分かれ、武術、体育、徳育、道徳、生き方となる。ところが、競技種目は試合をすることで成り立つ活動形式でそれはシンプルで狭いものである。競技スポーツが実現しようとしているものは柔道の目的のほんの一部にすぎず、勝ち負けだけにこだわると柔道の本来的目的に到達することは出来なくなる。柔道がスポーツ化しても一瞬たりとも柔道の特殊性が何をもとに成り立っているか忘れてはならないのです。

トさんは35歳で柔道五段、パリの大衆の博士です。嘉納師範についての論文をほかにも色々執筆されていて東洋言語大学教師、フランス国立科学センターの研究員という方です。このような論文を見たりすると若い人なのに、よく研究されているなということ非常に感心いたしました。

今回フランスの情報を紹介したいと思います。フランス柔道連盟会長のジャン・リュック・ルーリュ氏がフランスのメディアに向けて、日本のように「一本」を目指す柔道、伝統的な柔道、より動きのあるおもしろい柔道を積極的に取り戻そうと説明していると、インターネットや雑誌で紹介されているようです。またフランス柔道連盟の中にインターネットサイトがあり、そこに日本からでもアクセスしてフランスでの国際大会全試合を見ることが出来るよう

なっています。

少し話は戻りますが北京オリンピックでご存知のように日本は金メダル4つ、銀メダル1つ、銅メダル2つ、計7つとり、国別にも二位で中国が金3つ、銅1つの4つで最高です。韓国は金1つ、銀2つ、銅1つでした。それ以外では、7カ国が金1個、銀、銅をとった国7カ国、その他各国と色々の国がメダルを得たということとIJFはみているようです。試合の内容では基準が甘いといわれますが「一本」で決まった試合が非常に多かった。また、「効果」と「有効」の差が非常にわかりづらいと柔道関係者は言っていました。また、コーチが自分の選手の応援のために審判に罵声を浴びせたりとか、コーチがうるさいと批判が出ていました。

これらの事にIJFは非常にスピーディに対応して1月より「効果」を

廃止しました。また、ズボンを握ったりすると、すぐ「指導」を取られるので、今回のパリ国際大会では皆ちゃんと組むようになりお互いに真っすぐ立ち、見合って試合するようになりました。延長戦も今まで5分だったのを3分と短くしました。立技で両者のうちどちらかの体の一部が場内に残っていれば、寝技と同じようにそのまま続けることになりました。試合は速くそしてダイナミックに動くことになりました。IJFは審判規定の変更をいろいろと行っています。柔道の本質にかかわるようなところに関しては日本も彼らを根気強く説得をして説明を深めています。IJFも新しい柔道衣測定器を採用したり、敗者復活戦をなくしたり、コーチがうるさいので一番端の方にコーチ席を用意したり、色々工夫しております。

それでは次に形のことについて述

べさせていただきます。講道館の形が国際化され、昨年11月、形のワールドカップがパリで行われました。日本も参加して「投の形」が二位、固、極、柔、護身の4つは金メダルを取りました。今年は世界選手権が10月にマルタ島で行われます。形への関心も非常に高くなっており、現在日本として、形のビデオをDVDにする作業に入っています。それと教本をとりあえず英語に訳して、講習会の充実を図り、形の大会を開こうと考えております。

今のこういう世界の現状の中で、日本の課題について述べさせていただきます。国際柔道連盟は99の国と地域が加盟しています。柔道のオリピック参加は、次のロンドンでは半分の100カ国になると思います。その中で柔道発祥国、日本への期待と、それに対する立場が非常に重要だと思えます。国際貢献の行い方、形の

教本、DVDをつくったり、外国の指導者、コーチを招いて正しい柔道の普及、日本の指導者を海外に送って直接指導、柔道の畳や柔道衣の贈呈等日本的な形で出来るのかなと思っています。国際感覚を養うことも大切で、海外に実際に出て経験することで勉強になります。海外の人達はスピーディです。それに感わされず対話し、同時に守るべき柔道の本質、伝統を頑なに守っていくことが非常に重要なところではないかと思っています。

(3) 講道館柔道試合審判規定（少年規定）について

真井中学校教員・全柔連審判委員会

高橋 健司先生

中体連の派遣による全柔連審判委員会の委員として少年規定の窓口として携わっています。皆様の質問やご意見を頂戴したいなと思います。

実は、3年前にこの少年団で審判講習をやらせていただきましたがその頃講道館規定の改正、また少年規定も改正に向けて案を練っておりました。ところが現在、IJFの審判情勢が大幅に変わりましたので、全柔連の審判委員会も大分かかるようになりまして、講道館規定の改正については再検討になってしまいました。現在、IJFの審判情勢にかかわるところが定着した後、国内の審判規定に関することを検討していく予定です。IJFのルールは変わりましたが、例えば講道館規定、まして少年規定では、片襟、片袖を持って、いきなり足を取っても、中学生の場合には試合者の程度に感じていることになっていきます。むしろ今の少年規定の方がもっとレスリングに近い形をやるうと思えばできるのではないかとこの問題は残されています。このように反則ストレス

で勝つ方法は幾らでもありますので少年規定を再度改正ではなく、正しい柔道というものを今一度しっかりと考えていかなければいけないのではないかなと思っています。さて講習のタイトルを『講道館柔道試合審判規定、少年規定』の解説と今後の課題』にさせていただきます。

「少年規定は、少年大会の試合中におけるケガの発生が起因となって制定された経緯があります。その防止策を講じるため、中体連では大会ごとに『申し合わせ事項』を設け、安全面と発育、発達段階を配慮して試合運営を行ってきた」ということで、全国大会で技能レベルの高い試合においてはいろいろなケガの申し合わせを作っている現状があります。中体連で試合運営の際の申し合わせをやっていることが、あたかも少年規定の改正があったかのごとく勘